

開館 15 周年記念 文学特別展

寂聴と徳島



2017年 4月8日(土)～5月28日(日)

月曜休館〈5月1日(月)は開館〉 9:30～17:00

徳島県立文学書道館

《関連展示》勝山泰佑 写真展
「寂聴さんと あのとき あのひと」



瀬戸内寂聴は1922（大正11）年、香川県引田生まれの父と、徳島市生まれの母の間に生まれた。城下町の名残を残す町角から浄瑠璃の聞こえる人情豊かな土地で育った。教育熱心な教師にも恵まれ、本を読むのが好きで綴り方が得意だった少女は、小学3年のとき「小説家になる」と決めていた。県立高等女学校入学直後、與謝野晶子訳の源氏物語と出会い、陸上部では万年補欠の三種競技の選手だった。18歳で東京女子大学に入学。結婚後、北京に渡り、敗戦、引き揚げ、恋、離婚などを経て作家となった。

また、寂聴は1960年から徳島ラジオ商殺し事件を取材したのをきっかけに、無実の罪に問われた富士茂子さんの支援を26年続けた。それは本人が亡くなった後の1985年、やっと無罪を勝ち取るという司法との長い闘いでもあった。1981年には故郷で寂聴塾を無償で開き、膨大な仕事を抱える中、足繁く徳島に帰り、塾生に熱く語りかけた。その故郷への想いは、徳島塾、文学書道館建設へと発展していった。2006年には県人初の文化勲章を受章し、記念碑ICCHORAが新町川の畔に建立された。

本展では、徳島の自然や遍路、伝統芸能、モラエスや薩摩治郎八など、ゆかりの人々を描いた作品をとりあげ、寂聴と故郷との関わりを紹介する。また1973年、寂聴51歳の出家の瞬間を撮影した報道写真家、勝山泰佑の写真展「寂聴さんと あのととき あの一ひと」も開催する。



1981年 寂聴塾



『真夜中の独りごと』
2004年 新潮社



『いま、愛と自由を—寂聴塾からのメッセージ』
1982年 集英社



姉と（3歳）



『嵯峨野日記』(上・下)
1980年 新潮社



母コハルに抱かれて
(生後半年頃)



『見知らぬ人へ』
1974年 創樹社



徳島県立高等女学校時代



『寂聴巡礼』
1982年 平凡社



『場所』
2001年 新潮社



『いざよひよ 瀬戸内篇』
1974年 筑摩書房



学芸会で（9歳）



見合い写真（20歳）



巡礼の旅

子供の頃、春は巡礼の鈴の音に乗って運ばれてくるものと思っていた。その爽やかな鈴の音と物哀しい巡礼歌は、吉野川ぞいの黄金色の菜の花畑のかげろうの中から湧いてきた。私の郷里の阿波の徳島には、四国八十八ヶ所の霊場の御札所が、吉野川北岸の村々に、第一番の霊山寺からはじまって、点々と畑の中に建っていた。

南国の春は早く、三月の声を聞くと、もう吉野川の水はぬるみ、川ぞいの村落には、花々がいち早く可憐な色を競いあう。

菜の花畑の道を花から少し高く巡礼のすげ笠をのぞかせ、三々五々並んでくる。群れてくる巡礼の一行は幸福な善男善女の信仰と遊山を兼ねた楽しい旅路であったが、ぼつんとひとり、群れを離れたすげ笠が、花畑に埋もれるようにうなだれがちに歩いてくるのは、人の忌み嫌う業病に犯され、肉親からも見放されて、永遠に故郷を家を追われた漂泊の巡礼が少なくなかった。

瀬戸内寂聴「吉野川」
（『流域紀行』1973年）より



1962年 大歩危にて



『随筆 道』
1965年 文化服装学院出版局



富士茂子さんと



徳島市文化センターで講演
1965年3月



2002年 文学書道館開館

沖縄デーをデモする「ベトナムに平和を！市民連合」(東京・有楽町 1969年4月28日)



暗くなるまで子どもの時間
(東京・荻窪 1966年4月15日)



東京大学安田講堂、立て籠もった学生と機動隊の攻防(東京 1969年1月19日)



フランスデモ
(東京・西新橋 1970年6月24日)



ボブ・ディラン(アメリカのシンガーソングライター、2016年ノーベル文学賞受賞)
(アメリカ・マイアミ 1978年2月)

写真展「寂聴さんと あの時 あの人」に寄せて

勝山 泰佑

1973年、アフリカへ取材に行く先輩に代わって、瀬戸内晴美の対談写真を撮影することになった。対談集「談話」である。

その仕事の終わりが近づいたころ、瀬戸内晴美出家、得度の撮影依頼をうけた。口外無用、他の人に相談厳禁であった。

11月14日、岩手・平泉中尊寺での得度をぼくはただ夢中で撮った。

瀬戸内晴美51歳、勝山29歳であった。

寂聴となつて1975年5月、京都・嵯峨野に曼陀羅山・寂庵を開き、85年5月には道場・嵯峨野僧伽落慶。巡礼、托鉢、岩手・八葉山天台寺晋山、敦賀女子短期大学長就任と、ことあるごとに撮影、記録した。寂聴のエネルギーは無尽蔵で、その行動はまったく予測不可能であった。

ぼくが大学で写真を始めた1960年代は学生が問題意識をもち、積極的に政治に参加し、キャンパスと国会前が地続きだと実感していた。その大きなうねりも69年1月19日の東京大学安田講堂「落城」の後、急速に終息していった。

報道写真を撮影の中心におきながら、ぼくのなかで瀬戸内寂聴はずっと大きな部分を占めてきた。

僧侶・作家と写真家の関係は40年を越えた。報道写真と共に、多くのことに立ち会い撮影してきた。

この写真展は写真家勝山の生前葬ともいえるかも知れない。

(文中 敬称略)



寂聴連を引き連れ阿波踊り(徳島 1988年8月12日)



天龍寺の修行僧と托鉢に出る
(京都・嵯峨嵐山 1978年11月)



八葉山天台寺 晋山式を済ませ、七條袈裟装束でのお練り
(岩手・二戸市浄法寺 1987年5月5日)



西日のあたる京都・寂庵の書齋(京都・嵯峨 1991年1月)



横尾忠則と銀座飯店前で
(東京・銀座 1973年7月)

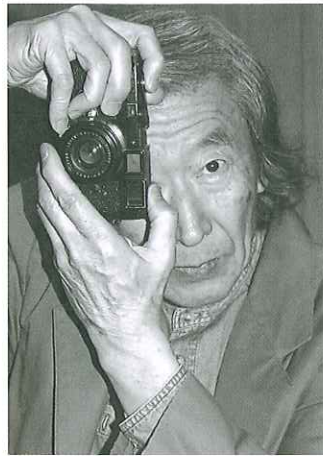


田圃で脱穀作業
(岩手・二戸市浄法寺 1987年10月25日)

勝山泰佑 (かつやま・ひろすけ)

1944年、東京生まれ。早稲田大学在学中に写真家・濱谷浩の助手になり、卒業後、フリーの写真家になる。雑誌「アサヒグラフ」「週刊朝日」「朝日ジャーナル」「中央公論」「文藝春秋」「太陽」「プレジデント」「住宅建築」などのグラビアに発表。78年、ボブ・ディラン日本公演全記録およびアメリカ最終ツアーを撮影。

2015年1月26日、写真集『できごと』『ひとびと』2冊組を出版し、神楽坂セッションハウス・ギャラリーにて記念写真展開催。16年、日本カメラ博物館にて勝山泰佑写真展開催。17年5月22日～27日、表参道画廊にて勝山泰佑写真コラージュ展開催予定。



瀬戸内寂聴「古稀を前に——」
『勝山泰佑写真集 寂聴』より

勝山さんは、得度の直前、大和書房で出してくれることになった私の対談集の写真を撮りに来た若いカメラマンであった。(中略)

背の高いスマートな、長髪のすっきりした美青年であった。色が白く端正な顔立は新劇俳優にでもむいていそうに思われた。(中略)

私が撮ってほしかったのは、剃髪の間であった。本堂の裏の部屋が、その場にあてがわれていた。

式の途中で私は座を立ち、別の部屋に行つて剃髪は果される仕組である。

その部屋には、私と、姉しか入らなかつた。剃つてくれたのは中尊寺の近所の床屋の娘さんで、20歳前後の可愛らしい人だった。道具はバリカンで、これにはど胆を抜かれた。

その時の一部始終を勝山さんは見ていた。

姉は途中で泣き伏したので、全部は見えていない。剃り手も夢中で客観的になつていない。私には自分が見えない。その広い冷たい部屋の中で勝山さんだけが冷静でしかと見とどけてくれていた筈だ。

勝山泰佑の写真集

『おじいさんおばあさん』	1976年 ほるぶ出版	『植村家の庭園』	1998年 私家版
『天台寺の四季』	1989年 (有)寂	『白寿』	2006年 私家版
『勝山泰佑写真集 寂聴』	1991年 朝日新聞社	『Photo50年 できごとひとびと』	
『海渡る恨』	1995年 汎友社(韓国)		2015年 れんが書房新社

《関連イベント》

1 勝山泰佑 ギャラリートーク

①「私の写真家人生と瀬戸内寂聴」

ギャラリーで展示している「寂聴さんと あのときあのひと」の写真家・勝山泰佑が寂聴との出会い、自らの写真への思いを語る。

4月8日(土) 14:00~15:00

〈申込不要・要観覧券〉ギャラリー

②「作品を中心に」

50年余にわたる100点の写真の中から、撮影時のエピソードや思い出などを語る。

5月14日(日) 14:00~15:00

〈申込不要・要観覧券〉ギャラリー

2 展示解説+「望郷 リスボン」鑑賞

「望郷 リスボン」は1993年、四国放送制作。寂聴がポルトガルを訪れ、モラエスの足跡をたどった番組。

4月29日(土・祝) 13:30~15:00

〈申込不要・要観覧券〉特別展示室・講座室

3 テーマ朗読会「寂聴が描いた徳島」

5月13日(土) 14:00~15:00

〈申込不要・入場無料〉講座室

4 展示解説+

文学まち歩き「寂聴ゆかりの場所を巡る」

—NPO 法人徳島ツーリズム 共同企画—

A: 4月22日(土) B: 5月18日(木)

9:15 徳島駅集合—文学書道館—ひょうたん島クルーズ—生誕地—文化勲章受章記念碑ICCHORA—瀬戸内神仏具店—阿波おどり会館 12:15解散

※10人程度募集

〈要申込・観覧券・ひょうたん島クルーズ代 200円〉

5 展示解説+

寂聴原作人形浄瑠璃「モラエス恋遍路」鑑賞

—阿波十郎兵衛屋敷 共同企画—

C: 5月20日(土)

13:30 文学書道館—14:15 寂聴棧橋からじょうるりクルーズ—15:00 阿波十郎兵衛屋敷で「モラエス恋遍路」鑑賞—徳島市営バス 16:02 阿波十郎兵衛屋敷発、吉野本町2丁目下車 文学書道館着

(雨天の場合、じょうるりクルーズは中止し、バスを利用します)

〈要申込・観覧券・じょうるりクルーズ代 500円・阿波十郎兵衛屋敷入館料 一般 410円、高大生 300円、小中生 200円〉

イベント A・B・C を希望される方は、ハガキ・ファクス・メールのいずれかに、住所、氏名、年齢、電話番号、イベント名を明記し、ご応募ください。応募者多数の場合は抽選で決定することもあります。決定後、ハガキでご連絡します。応募締め切り **A: 4月15日(土) B: 5月10日(水) C: 5月13日(土)**



《観覧料》

一般 510(400)円 高校・大学生 350(280)円 小・中学生 250(200)円

() 内は 20人以上の団体割引料金。小・中・高校生は土・日・祝日・春休み期間中無料。65歳以上の方、各障がい者手帳をお持ちの方は半額。

《交通アクセス》(JR 徳島駅から)

■徒歩 約15分

JR 徳島駅西側のポツポ街を抜けて右折。踏切と助任川を越えて、3つ目の信号交差点を右折して約300m。

■バス

[徳島市営バス] 7番乗り場「川内循環線(右回り)」に乗車。「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。
[徳島バス] 2番乗り場「前川経由」に乗車。「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。

■自動車 約5分

国道192号線、藍場町交差点を北進。助任川を渡り、4つ目の信号を右折して約300m。当館北側に駐車場があります。

(県外から)

四国内、京阪神は高速バスの便が多く、東京、福岡からは飛行機があります。空港から徳島駅までリムジンバスで30分。